

# 大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.77  
2009.2

冬

## 特集 国際文化交流の中の出版

出版文化国際交流会の活動 江草忠敬……………2

出版——国際文化交流の「かたち」 高須奈緒美……………6

ベオグラードブックフェア

現地アテンダントの日本文化交流 ミヤイロビッチ・イゴル……………11

ゲート・インステイテュート主催研修旅行に参加して

佐伯かおる……………15

韓国・国立忠北大学出版部二十五周年記念大会に参加して

竹中英俊……………18

## ●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

ジャン・コクトー著 東郷青児訳『怖るべき子供たち』 酒井道夫……………表2

大学出版部ニュース……………22



有限責任中間法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェティシズム

ジャン・コクトー著 東郷青児訳

## 『怖るべき子供たち』

酒井道夫（武蔵野美術大学）



挿画の変化が興味深い、青児訳の「イケナイ本」たち

私が東郷青児訳の本書に初めて遭遇したのは、角川文庫版の第三版（二九五四、写真右手前）である。十五、六才をそれほど過ぎない頃のこと。まだ当時の本をそのまま所持しているほど、私の青春における忘れられない一冊。世の中にはイケナイ本があることをこの時知ってしまったのだ。全体にラリッたような文体で、青児筆になる虚無的な挿絵が四葉挿入されていた。後に岩波文庫に鈴木力衛訳があるのを知って読んでみたが、これがさつぱり面白くも何ともない。格調高い訳だからといって万事が良しというわけではない。こつちを先に読んでいたら、私はその後、そんなにコクトーを意識しないで過ごしていたかも知れない。

この書の初版（白水社刊、一九三〇、右奥）には巻頭に有島生馬宛献辞があつて、その対向ページに「翻訳・挿画・装幀」と記され、ジャケット折り込み部分に「挿画頒布鳥の子紙別刷置紙入十二葉定価一円二十銭送料五十銭」とある。このセットを誰か所有しているんだろうが、生憎私は見たことはない。ちなみに、私の手元にある本書は定価一円五十銭。挿絵は十二葉が鳥の子紙別刷で挿入されているが、なかなか良い刷りだ。別に頒布されたセットが大いに気になるところ。

戦後の一九五〇年に、やはり青児による挿画・装幀で、ソフトカバー版（白水社刊、左手前）が刊行されている。折丁の関係だろうか、挿画を一枚減らして十一葉が別刷りで挿入されているが、初版と較べると相当落ちる。何故か奥付に「翻訳権取得」とある。それまで取つてなかったのだろうか？

これらの他に一九四七年、明治図書出版から、壮絶な仙花紙で刊行されている（左奥）。挿画は三葉だが他書とは異なったもの。初版の挿画がいわば爽やかな筆致なのに、時を経るにつれて虚無的な相貌を帯びてくる。私は画家の心象がもつとも荒んだ時代のそれと出会っていたのだろうか？ イケナイって魅力的。

## 特集

# 国際文化交流の中の出版

国際文化交流事業を企画する人、送り出す人、迎える人、行ってきた人——彼らの取り組みや活動、体験や報告の中に「出版」が占める位置、役割を見る。

# 出版文化国際交流会の活動

江草忠敬（社団法人出版文化国際交流会会長）

## 国際図書展日本ブースの一般的イメージ

幼稚園児ほどの女の子を伴った外国人の母子が楽しげに日本の児童書を読みている、あるいは若いカップルが仲良く日本の写真集をめくっている。その傍らでは研究者らしき人が日本の特定のテーマの図書を熱心に見入っている、また出版関係者と覚しき人が日本の出版情報資料を手にとっている。いずれも外務省の協力を得て独立行政法人国際交流基金と本会が共催で参加する国際図書展の日本ブースにおいて、日本からの派遣専門家が目にする一般的な情景である。年間にして十数件の参加であるが、二〇〇八年度実績を開催会期順に記すとブエノスアイレス、ブダペスト、ボゴタ、プラハ、ワルシャワ、テヘラン、ソウル、サンパウロ、フランクフルト、ベオグラード、モスクワ、ビリニユスの十二件である（このうち、専門家派遣を実施したの

は六件）。

ここから出版物を通じた様々な出会いと交流が始まる。本会にとつて原点ともいえる場である（写真1）。

## 出版文化国際交流会の成立と生い立ち

本会は一九五三年（昭和二十八年）十月二十九日にアジア文化交流出版会として発足した。初代会長に平凡社の下中弥三郎氏を戴き、事務局は神田錦町のオーム社に間借りしてのスタートだった。当時、第二次世界大戦後の混乱期を脱しつつあるとはいえ、日本の出版物を海外に紹介するという発想は荒唐無稽ともいえるものであった。

三年後の一九五六年、アジア文化交流出版会を発展的に解散し、三笠宮崇仁親王殿下を名誉会長にお迎えし、現在の名称組織である出版文化国際交流会が設立された。

一九六〇年、第十二回フランクフルト・ブックフェアに



写真1 ビリニユスブックフェア

三〇名の視察団を編成した。この視察が大いなる刺激となり、翌一九六一年のフランクフルト・ブックフェア出展参加につながる。当時も今も世界最大規模を誇るこのブックフェアの国際舞台に進出していったという意味では日本出版界が国際化の一步を踏み出したといえる。爾来、フランクフルト・ブックフェアへの参加は毎年続き、一九九〇年にはテーマ国「日本」として予算規模、十数億円を投じた日本文化紹介の様々なイベントが繰り広げられた。二〇〇一年からは出版三団体（大学出版部協会、自然科学書協会、出版梓会）の学術書、専門書を紹介するコーナーを設け、

好評を博している。

一九七〇年代から一九八〇年代にかけて、一種の流行現象のように世界の多くの都市で国際図書展が誕生し、必然的に在外公館、あるいは在日各国大使館から日本への参加要請が増加した。この状況を受け、一九八七年外務省支援の下、国際交流基金と本会に

よる共同プロジェクトとして「国際図書展参加事業」が予算化され、スタートした。これにより世界の主要な国際図書展への計画的、組織的な参加が可能となった。このプロジェクトは本会のみならず、日本の出版界にとっても非常に意義あるものとなっている。

二〇〇三年には創立五〇周年を迎え、名譽会長三笠宮殿下ご夫妻のご臨席をいただき、東海大学校友会館にて盛大な記念パーティが開催された。

### 出版文化国際交流会の活動について

本会の定款では、「この法人は、日本と外国との相互理解を深めかつ親善を増進するに役立つ総ての出版物の交流を計り我が国出版界の向上を期することを以つて目的とする」と謳っている。具体的な活動としては国際図書展への参加が中心となる。現在、世界各地で開催される国際図書展は年間にして九十件を超えるが、本会では創立以来、延べ四〇〇件ほどの国際図書展に参加し、日本の出版文化の紹介に努めてきた。ここで、伝えられるエピソードを交えながら活動の一端を紹介したい。

#### 【フランクフルト・ブックフェア】

初参加となった一九六一年の第十三回フランクフルト・ブックフェアでは日本の参加が各国出版界の注目を浴び、現地のマスコミ関係者が連日のように日本会場を訪れ、新聞・ラジオで紹介された。しかし、その中には「日本で印

刷ができるのか」「日本で本が作れるのか」というような、現在では想像できないような質問もあった。当時は一ドルが三六〇円の固定相場制であり、しかも外貨持ち出し制限が大変厳しく、本会責任者が大蔵省（現、財務省）に何度も通って交渉したという逸話が残されている。実際、二回目の出展参加となった第十四回フランクフルト・ブックフェア（一九六二年）の視察団は二十七名の参加記録となっているが、これは三十名を越える希望者があったにもかかわらず、外貨予算の獲得が困難なため、辞退を要請した結果である。また三回目の参加となった第十五回フランクフルト・ブックフェア（一九六三年）の前夜祭において、野間省一会長が全世界の出版人を代表して挨拶を述べた。当時、いかに日本の参加が注目を浴びたかの証左といえる。

フランクフルト・ブックフェアは世界から一万人を超えるプレス関係者が集まり、商取引の面だけでなく文化広報の場としてもその重要性は無視できない。一九九〇年の「日本年」をきっかけとして国際交流基金からの助成もあり、日本インフォメーション・センターは格段に充実した。外国出展者・来場者からの各種問い合わせへの応接も含め、同センターの果たす役割は大きい（写真2）。

#### 【その他の国際図書展】

国際交流基金と本会による共同プロジェクトが始まる以前の国際図書展参加は、フランクフルトを除くと実に涙ぐましい努力の上になりたっていた。本会が会員社の協力を

得て出展図書を提供し、外務省がブース代を含む現地経費、国際交流基金が送料を負担という形で参加した国際図書展はひとつやふたつではない。今でこそ児童書のフェアとしてゆるぎない地位を占めているポローニャ国際児童図書展にしても、その誕生初期は在京のイタリア文化会館より再三の参加要請があり、ブース代を無料提供の条件で出展した経緯がある。

現在では、冒頭に挙げたような国際図書展に出展・参加しているが、いずこの図書展でも日本のブースは人気がある。近年では「日本」をテーマ国、ゲスト国として開催を希望する図書展が増えている。

#### 【外国図書の展示会】

本会ではさまざまな国々で「日本図書展」を開催してきたが、国内でも単独の国の、あるいはテーマをもった図書展を数多く実施している。その中で感銘を受けたエピソードがある。「ドイツ新刊図書展」を一九六九年から一九七〇年にかけて、東京を皮切りに全国十七都市で開催した。この時、ドイツからは厚さ二センチほどの立派な出展図書カタログが二万部送られてきた。これを前にして、「こんなに大量な部数、とても配布しきれない」とドイツ側責任者に伝えたところ、「どんなに小さなお子さんでもよいから差し上げてください。このカタログがきっかけとなって、その子たちが将来ドイツ語、ドイツの文化に親しみを持つかもしれません」との答えが返ってきた。これを受け、カ

タログは総て配布された。

### 【三笠宮文庫】

三笠宮文庫の原点は、一八八三年アレクサンドル三世に明治天皇のご名代として謁見された有栖川宮熾仁親王殿下ありすがのみやまのむねひとが、当時すでにペテルブルグ大学で日本語講座が開かれていることに感銘をうけ、ご自身の蔵書を同大学へ寄贈・設立された有栖川文庫にある。第二次世界大戦中、レニングラード大学のオリガ・ペトロワ先生が有栖川文庫を戦火から身を賭して守られた。これを知って三笠宮殿下は大変感動され、一九七七年にソ連科学アカデミー図書館に出版



写真2 フランクフルトブックフェア2008

界の協力を得て三八一冊の図書を寄贈されたことにより、三笠宮文庫が誕生した。本会では二〇〇三年の創立五十周年記念として二回目の寄贈を実施したが、さらに同文庫の拡充をはかるため、フランクフルト・ブックフェアに出展する前述の三団体の図書を二〇〇七年より三年

間にわたって寄贈することになっている。

### 今後に向けて「ゆるやかなネットワークづくり」

アメリカのサブプライム・ローン問題に端を発した世界金融危機は多くの国々に深刻な影響を与えているが、一方において国境を越えて情報の伝わる速度は高度情報化社会の現実を垣間見させた。

しかしながら文化の交流となると、ことはそれほど容易ではない。特に出版物の交流では地道な永い時間と労力が必要とされる。ひとつの翻訳作品が出来上がるには版權仲介を業とする人を始めとして編集者、翻訳者等、多くの人に関わり形を成していく。結果として村上春樹やよしもとはななに代表される作家の作品は、私どもにあまり馴染みのない言語、例えば話者一〇〇万ともいわれるバスケット語を含めて数十カ国語で出版され、愛読されている。コミックの『ドラえもん』然りである。出版物は時空を越えて多くの人に感銘を与え、自ずと文化を伝える。まさに先達という「本は沈黙の外交官」たる所以である。

本会は今後も国際図書展への参加を中心に活動を続けていくが、これには会員社の支援はもちろんのこと、活動の性格上、外務省、国際交流基金のご協力を得ることは不可欠である。今後は「ゆるやかなネットワークづくり」をひとつのキーワードとして他団体との連携をさらに強めていきたい。

# 出版―国際文化交流の「かたち」

高須奈緒美 (国際交流基金芸術交流部映像出版課 課長)

## JŌMON、メトロ、レヴィイストロース

一九九八年九月、パリ十五区。開館から一年を経た国際交流基金パリ日本文化会館は、「縄文展」に訪れた人々でごった返していた。文化庁共催、国宝二件及び重要文化財二十五件を含むこの展覧会は、縄文のヴィーナスや火焰式土器など、誰もが一度は教科書で目にしたことのある縄文文化の粹を集めた日本でも例を見ない大型展。構造主義の泰斗、クロード・レヴィ・ストロースがカタログに序文を寄せたこともあり、二ヶ月で三万四八九人という異例の観客を動員、会期中のカタログ販売も三千冊を超えた。展覧会初日、大型ポスターがところ狭しと貼られたメトロの駅に降り立ったレヴィイストロースは、九十歳を迎えて杖こそ手にしているものの、矍鑠たる足取りで一時間にわたってひとつひとつの作品を見て回り、帰り際の「カタログ、

あとでお届けしようか」との問いににっこり笑って「とんでもない、一刻も早く手に取って、ゆっくり読みたいから自分で持ち帰りますよ」と長身の瘦軀を翻し、再びメトロの駅に消えていった。

## カタログに見る国際文化交流という営み

あの日の人類学者の飾らない後姿を思い出すたび、私は出版というものに凝縮された国際文化交流の「知のかたち」を考える。レヴィイストロースは一九七七年、国際交流基金の招きで初めて日本を訪れた。以来三十年以上の長きにわたり、日本を愛する碩学として文化を論じ、『国際交流』九七号（基金三十周年特集「地球的多文化共生の時代を迎えて」）にも文化交流の原点に触れる書簡を寄せた（注）。縄文展については当初原稿執筆を躊躇していたが、出展予定作品の顔ぶれを見て、「これほどの作品群であれば」と



受けてくれた経緯がある。同じカタログに論文を執筆した国立東洋言語文化研究所 (INALCO) のマセ、ベルチエ両教授は元基金フェローで、フランスを代表する日本研究者。INALCO は優れた研究者を多数輩出し、業績の出版も行う高等教育機関である。その日本研究を長年主導したジャン・ジャック・オリガスは一九八八年に国際交流奨励賞を受賞したが、今回日本側の論文や作品解説を翻訳したのは、彼が手塩にかけて育て上げた日本研究者たちであった。カタログ編集や広報資料作成にあたったスタッフも、彼から日本語と日本の何たるかを学んだ愛弟子たちである。かくして J・O・M・O・N をめぐるとさまざまな知的興奮は結集し、思考のプロセスは記憶として固定され、「手に取ることのできる」出版物に結晶した。縄文展のカタログは、その年の「最も優れた出版デザイン」のひとつにも選ばれている。

### 国際文化交流の力学—出版の位置づけと役割

出版は、ひとの感動と知的興奮の記憶を書物という形で固定し、書物は流通と再版により、広く長くその価値を共有する。「国際文化交流は人に始まり、人に終わる」という松本重治の言葉は、国際交流というものがすぐれて人間の感動の共有に向けた力学であることを示しているが、その活動の相互連関性の中での出版というものについて、改めて考えてみたいと思う。

### 出会いの場をつくる—図書展と図書館

ひとはまず、日本と出会うだろう。多くの人々がまとまって日本と出会う場としては展覧会・コンサート・映画祭などがあるが、これらと並び、国際図書展や図書館も重要な出会いの場である。図書展は出版関係者のみならず、政府要人から一般市民まで多いときは二〇〇万人以上が訪れる巨大文化行事であり、日本に関する図書を展示して講演会やワークショップなどの催しを行えば、きわめて効率的に「日本との出会いの場」を創出できる。最近の日本語教育や若者文化への関心の拡大が期待できよう。国際交流基金は一九八七年から本格的に国際図書展への参入を開始し、以来二十一年間に出版文化国際交流会とともに参加した国際図書展の数は四十九カ国、三八六件にのぼるが、日本がテーマ国となった二〇〇八年のベオグラード国際図書展の場合、文化大臣、教育大臣、旧王族など要人臨席のもと、テレビも入って大々的にオープンし、会期中十五万人が訪れた。日本は約七〇〇冊の図書展示に加え、日本の作家や現地日本研究者による講演会、織物展、京都や建築のパネル展示、漫画ワークショップなどを会場で催し、市内では日本映画を上映し、総合的文化紹介が展開された。

これに対し、図書館は「撤収のない図書展」ともいえるべきものである。国内三カ所、海外十八カ所に展開する国際

交流基金図書館は、現地語を含む数千から数万冊の蔵書により、恒常的な日本とのふれあいの場を市民に提供している。基金図書館の顕著な特徴は、国際文化交流を目的とする専門図書館だということであり、日本研究、日本文化の情報発信及び翻訳、日本語教育、国際交流論などを切り口とした蔵書充実を図ることで、研究者から漫画ファンに至るまで、日本に関心を持つ多くの人々のアクセスを可能にしている。

### ひとを育て、ものを生み出す―翻訳と出版

展覧会もコンサートも図書展も、一度きりではいざれ忘れられてしまう。いったん日本と出会ったひとが、より深くより長く日本と付き合っていくためには、あの手この手で愛情をつなぎとめなくてはいけない。それには魅力的な催しの継続とともに、日本を発信する「ひと」・「もの」の質と量の充実が不可欠であり、出版はその中核をなすと言っても過言ではない。国際交流基金はこれまでに、少数言語を含む四十九カ国語、のべ一八九〇冊の日本関連図書の出版・翻訳を支援してきた。その範囲は古典から現代文学、歴史や民俗学、政治・経済から哲学・宗教、日本文化論から児童書まで人文・社会科学を網羅している。外国人研究者による日本文化論をアジアや東欧の日本研究者が現地語に翻訳するケースも見られ、翻訳のみならず研究者による書き下ろしも五〇〇冊を超える。これらは英・仏・独・西

・露・中・葡・アラビア語などの広域的汎用性の高い言語に加え、韓国語やインドネシア語、デンマーク語など北欧諸言語やチェコ語など東欧スラブ系言語、トルコ語、ペルシャ語、ヘブライ語、イタリア語といった、話者の数は比較的少ないものの長年にわたって日本研究が育まれてきた国・地域の言葉でも成果がまとめられており、各国で広く一般市民に受け容れられている。

これらの書物は、日本研究・日本語教育分野での長年の人材育成の果実である。来日した基金フェローは一九七二年以来のべ六千人を数え、その研究分野も人文・社会科学のあらゆる分野に及び、各国で交流の芽は着実に育っている。これらフェローは全員が、今後も国際交流の種を蒔き、出版物を生み出し続ける可能性を持つ、いわば「宝の山」である。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』のエズラ・ボージェル、韓国初代文化大臣になった『縮み』志向の日本人の李御寧、『代議士の誕生』のジェラルド・カーティス、ペルー大統領になったアレハンドロ・トレドなど、日本研究の中核の人材や国の指導者となったフェローの例も枚挙にいとまがない。

優れた人が育ち、良き書物を生み出す上で、日本語教師の育成と日本語教材の制作・出版も大きな原動力となっている。これまでに基金は一〇〇カ国を超える国からのべ九六〇〇人余の日本語教師を日本に招へいして研修を実施した。また基金自主制作教材は、十四カ国語に訳された『基

礎『日本語学習辞典』をはじめ、約六十タイトル五〇〇点あまり。さらに、各国の事情に合わせた教材制作プロジェクトに対して行った助成は五十二カ国三三八作品、うち二十一カ国七十作品が日本に招へいた日本語教育フェローとの協働の成果である。ここにも私たちは、ひとのつながりが紡ぎだす「知のかたち」を見る。

### ひとをつなぎ創造の仕掛けをつくる―専門家交流と情報発信

レヴィ・ストロースのみならず、国際交流基金は、オクタビオ・パス、ガルシア・マルケス、V・S・ナイポール（以上、基金が招へいた後にノーベル文学賞を受賞）、カズオ・イシグロ、ウンベルト・エーコ、ウオレ・シヨインカなど数多くの作家を招へいし、日本の文学者や研究者、出版人との交流を深めてきた。また国際図書展への専門家派遣、日欧の大学出版関係者相互交流、海外の日本関連図書所蔵する図書館司書研修などにより、出版交流専門家のネットワーク形成を促進している。なかでも図書展への派遣は、専門職能集団が同じ屋根の下で数日間わたって時間と空間を共有し、「顔の見える」形での流通経路の拡大を行うことができるので、出版国際交流の促進に大きな効果を持つ。

人物交流とならば出版交流の息の長い仕掛けづくりにおいて、とりわけ重要なのが出版最新情報の発信であろう。

国際交流基金は一九九三年から季刊 *Japanese Book News* (JBN) を発行し、日本の新刊書の書誌情報や出版界の最新情報、テーマ別特集などを英文で提供している。日本における新刊情報を、包括的に英文で紹介し続ける雑誌は他に例がなく、出版関係者のみならず、文学者、研究者、図書館司書などにも活用されている。ちなみに過去に発行された全五十七号の中で紹介された作品のうち、少なくとも九十九作品がのべ二十八言語に翻訳され、二五六の作品として出版されたことが確認されている。

日本研究に関しては、一九七四年から『日本研究基本書目』 *An Introductory Bibliography for Japanese Studies* により、日本の人文・社会科学分野の学界の動向と研究成果を、主要な文献とともに英文で紹介してきた（一九八七年から東方学会に委託）。「社会科学編」「人文科学編」を毎年交互に発行して海外の日本研究機関や図書館に配布してきたが、二〇〇七年、第十五巻を以て休刊となった。三十年以上にわたるシリーズは日本研究の軌跡としても貴重な資料であり、新しいメディア状況も踏まえた今後の発展的継承が望まれる。

### おわりに

ひとが出会い、感動や知的興奮を共有し、それぞれの異文化理解を多層的に積み重ね、出版というかたちに結晶させた瞬間から、書物はひとの手を離れ、自らの言語によつ

て語りだす。版を重ね、国境をはるかに越え、数千数万単位で世界をひとりあるきする書物は、数え切れない人々が手にとつて擦り切れるまで、その輝きを失うことはないだろう。良き種は、豊かな肥料ときれいな水を与えられ、明るい日差しを一身に浴び、いつくしみ育まれて大輪の花となる。寒い国でも暑い国でも、肥沃な土地であろうとやせた土地であろうと、長くいつくしみ育てる喜びと、花の美しさへの驚きは変わらない。国際交流を生業とする者として、その美しい「かたち」にあくまで誠実であり続けたいと思う。

なお、本稿で述べられた意見・主張は筆者の個人的見解であることをごにお断りする。

(注)「数多くの視点を提供しつつ、基金はあたかも『私たち(日本)はこういうものです。あなた方は自分で判断し、自分の意見を形成してください』というが、ごとき感嘆に値する誠実さを示します。ここに、基金は異なる文化間の対話を成立させる唯一の健全な基礎があるかを明らかにしているのです」(二〇〇二年六月十日付「国際交流基金への書簡」、「国際交流」第九七号に収録)。  
文中敬称略。

# ベオグラードブックフェア現地アテンドの日本文化交流

ミヤイロビッチ・イゴル（岡山大学大学院社会科学分科学研究科研究生）

## ブックフェア

セルビアの首都ベオグラードでは毎年十月にブックフェアが行われる。ベオグラードブックフェアは全バルカン半島で最大のブックフェアと言われており、在セルビア日本大使館も毎年積極的に参加している。ブースでは日本文学の作品（セルビア語訳と英語訳を含めて）を展示したり、文部省の奨学金への申込みに関する情報を提供したり、お客さんに折り紙の折り方を教えたり、観光的なパンフレットを配ったりする活動を行っている。私も日本の大学への留学の経験者として、日本への留学に興味のある学生に詳しい情報を提供していた。多くの人が日本ブースに立ち寄り、セルビア人が日本に興味を持っていることがわかった。それは単純な好奇心に基づいた興味ではなく、日本ブースを訪れる目的を持ってブックフェアに来ているようだ。そ

ういう人は予想以上に日本に詳しい。折り紙を趣味として専門家ほどに上手な人が何人も訪れ、自発的に他のお客さんに折り紙を教えていたりもした。おかげでブースは日本らしい雰囲気になって、とても盛り上がりつつあったと思う。

日本ブースでは英語訳の古典を始め、現代小説、日本文化に関するいろいろな出版物が展示されていた。来訪者は作品を手にとって真剣に内容を読み、日本文化への興味が深いようであった。そしてある本が気に入って、どこで買えるかと問いかけてくるが、今のところインターネットが唯一の購入方法だと答えると、残念そうにその本を本棚に戻す。せっかく日本に関する知識を高めたという気持ちがあるのに、その本が手に入らないとはもったいないと思わずにいられたかった。さらに翻訳の問題もある。日本の文化を詳しく知るために日本文学の古典を読むことが初め一歩だと言われているが、セルビア語訳の古典はほとんどな

い。『枕草子』のセルビア語訳は以前から出版されているが、最近になって『古事記』のセルビア語訳が出版されたそうだ。主要な古典には英語訳があるが、簡単に手に入らない。一方、日本文学の現代小説はセルビア語訳があり、とても読まれている。最近の三年連続ベストセラーの第五位以上になっている村上春樹の小説は、ブームになっていると言っても言い過ぎではない。ところが、英語ができないセルビア人の読者には日本文化を詳細に知ろうとしているのを知る方法がない。英語ができたとしても、セルビアの本屋で一般的に売っていないので購入できない。その事実をと

ても残念に思う。



ブックフェアでは、日本と直接には関りをもたない多くの人々が日本ブースを訪れ、日本のことを興味深く聞いたり本に掲載された写真を見たりしている。これは、セルビア人のもつ日本へのイメージが非常にいいという証拠である。日本の出版物をセルビア語に翻訳してセルビアで出

版することは簡単な事業ではないし、セルビア人は日本の文化に興味があるからといって必ずしも利益が出るわけではないが、一万キロほど離れている二つの国の文化交流にとっては、第一で大事な一歩なのではないかと思う。

### 自己紹介

私はセルビアから来たミヤイロビッチ・イゴルです。岡山大学への留学は二回目で、今回は社会文化科学研究科の研究生として、比較文化を専攻している。セルビアの一般的な人は、日本についてあまり知らない。私が日本語を勉強するきっかけとなったのも偶然だった。セルビアの首都のベオグラード大学日本語日本文学学科に入学し、四年間日本語を勉強して、岡山大学に留学することになった。ベオグラード大学と岡山大学は姉妹大学で、大学が私のことを推薦し、岡山大学に日本研究生として入学することができた。一回目の留学は一年間で、そのプログラムは二〇〇七年八月に終了し、帰国後、ベオグラード大学を卒業して再び岡山大学に留学することにした。二〇〇八年十月に来日し、一年半研究をする予定である。日本語と日本の文化をより深く知るように努めたいと考えている。

### 日本体験——一回目の留学

来日して数週間もたたないうちに友達ができ、岡山の生活にも慣れ、カルチャーショックはいつの間にか完全に収

まっつてしまった。日本を満喫できる時期がやつと来た。

【秋】一ヶ月後、中国地方では紅葉が見えるようになった。日本人の四季に関する感覚についてはベオグラードでもよく聞いており、桜や紅葉の写真を見たこともあったが、日本に来てからはその意味がわかった。備前閑谷学校の辺りに行って紅葉の美しさを生まれてから初めて味わった。紅葉はセルビアにもあるが、その見方が違うことが分かった。料理が四季の一巡と深く関わっており、松茸ご飯を食べながら日本における初めての秋の味を楽しんだ。授業では茶道、書道を体験し、日本文化の基本を実感した。

【冬】日本では冬といえば北海道の真っ白さが頭に浮かんでくる。流水の時期に東北北海道を訪れた。空が真っ青で、流水の素晴らしさ、そしてその風景に仰天した。さらに北海道の真ん中へ行き、北海道の広さを見て、大陸の特徴が多く、自然が本州と違うことがわかった。日本でありながら日本ではないような気がする。変な話だが、母国から一万キロメートル離れているところにいる私は懐かしい気持ちになった。水平線の向こうに太陽が沈んでいる風景を眺めながら、世界の端に立っているという気持ちは今でもくつきりと印象に残っている。

【春】満開の桜の花は写真でもきれいなものだと思うが、その本当の良さは写真からわかるものではない。四月になり、春の兆しが次々に訪れる。岡山市を流れている旭川の後楽園ではお花見が毎年行われ、私ももちろん岡山の一員

としてそこでお花見を楽しんだ。バーベキューをしたりお酒を飲んだりするのが楽しかったが、日本の古典文化によく出ているお花見の本質は少し違うような気がしていた。だから、先生に少し違うところへ連れて行ってもらった。人が多く集まらない、山の方である。満開がすでに終わり、花が落ち始める時期であった。私は日本人ではないが、ヨーロッパ系の言語に訳せない「せつない」という言葉の意味が何となくわかってきた。今からすると、これは日本文化を理解するには重要な経験のように思う。

【夏】日本の夏というと沖縄に限る。冬の北海道の正反対を知るためにそこに旅行することにした。鹿児島市の港でフェリーに乗り、途中で興味のある島々に降り、数泊して最南端まで行くという方法を選んだ。最終地点は石垣島。奄美大島の人間の親切さや好奇心、与論島の人々のんびりした生活、自分の島への一体感などが忘れられない思い出になっている。さらに、沖縄本島における中国からの影響を知り、沖縄そばを味わい、石垣島に向かった。そこから日帰り旅行で日本最南端を訪れた。静かな島で、東シナ海の波がその海岸にぶつかっている潮騒しか響いていない。わずかな数の島人は農業を営んでいる。こゝも日本である。北海道や東京、京都や岡山などと全然違うがそれなりに日本である。

日本全国を渡った旅は、日本文化と日本人の考え方を理解するのに役立つ経験である。日本は世界の国々の中で

面積的に大きい方ではないが、その文化の広さが旅からよくわかった。さらに地域によって人々の違いが多少あることは当たり前であるが、最北端や最南端にしても、東京の渋谷や取り残された田舎にしても、日本人の基本は一緒であった。日本人であることをしつかりと自覚しながら、外国人と異文化を心がけて、自国の習慣や思考に合わせて受け入れようとするものが昔から日本民族にある。このことを理解したのがこの旅の最大の発見である。これは海外からの影響をうまく受け入れる能力である。この適応力は日本文化の重大な要素であり、文字や仏教を取り入れたときの能力を生かしている。現代世界で日本は高く評価されている国であるが、その秘訣の一つはその適応力だと思う。

国民の世代による違いもよく見えてきた。その違いはどの国にでもあるものだが、日本の場合は比較的大きいと思つた。若者は西洋から来たものを好み、日本の伝統的なものを大切にしないことがわかつたのである。マクドナルドで食べたり、ディズニールランドで遊んだりしている。本州生まれ育つた人は本州以外の島に行つたことがなかつたり、岡山の人には東京に行つたことがなかつたりするが、アメリカやオーストラリアには行き来している例が少なくないことには違和感を覚えた。

また私と日本人大学生との考え方にギャップが大きかつたので、社会人とよく付き合っている。たまたまある会社員の仲間と知り合い、仲良くなつた。社会人との付き合い

から勉強になつたことも多い。その友達は普通の会社員であり、私は日本企業内の対人関係について学んだ。会社員同士は、職場以外でどんなに親しくても部下は上司に対して尊敬を払い、上下関係を守つていくことがわかつた。日本会社の組織についてベオグラード大学でも勉強したことがあるが、目の前でそれを生で見えて、貴重な体験になつた。帰国して日系の会社に勤めたとき、とても役に立つた。

一回目の留学を振り返つてみると、岡山大学での留学はとても有意義だつたと思う。日本語を通して地元の人と話し、彼らの発想と実際の生活を十分理解できるようになつた。そして、ここでは日本語の大切さを強調したい。日本語は独特の言葉であり、日本の文化と深く係わっている。日本人は外国語が苦手なので日本の文化について詳しく説明できないということではなく、日本語には外国語に訳せない用語が多いからである。日本の文化の本質が伝わるのは日本語だけである。これは日本語ができない西洋の人には理解できないかもしれないが、私は日本に一年間滞在してからわかつた。しかし、日本の文化を知るためには一年間は十分ではない。全然環境が違う国で生まれ育つた私は、日本を完全に知ることができないという意識を持つている。だから、ある程度まで知り、自国で日本の良さを伝え、二ヶ国の関係を深めるといのが今回の留学の目的である。



# ゲート・インスティテュート主催研修旅行に参加して

佐伯かおる (京都大学学術出版会)

## 研修旅行の概要

二〇〇八年三月中旬、ちょうどイースターの準備期間に、ベルリンとライプチヒの二都市を訪問しました。ゲート・インスティテュート(東京ドイツ文化センター)によって企画・主催された日韓若手出版人のための研修旅行で、ドイツ語の翻訳者、主に文芸系編集者、その他出版関係者を、日韓両国から十数名招き、ベルリン市内の出版社、新聞社、文学館、書店、そして地域図書館での取り組みや朗読イベント企画などを見学し、担当者に話を伺いました。ライプチヒではブックフェアのブースを見て回り、翻訳権の交渉を実地に行うなど、非常に密度の高い内容でした。

この研修旅行はゲート・インスティテュートでは初めての試みで、ライプチヒブックフェアの時期に合わせて、ドイツの文学と児童書を日韓の出版人に紹介することが主要

な目的です。そういったなかで、大学出版部協会から学術出版の編集者として参加した私は、同じ出版の現場とはいえ、文芸系と学術系の世界の違いもあり、非常に新鮮な刺激を受けました。

## ベルリンでの出版社見学

成田からフランクフルトを経由して到着したベルリンでは、三月九〜一二日の毎日、朝九時から夕方まで休みなく出版社等の見学を一日四〜五件、昼食・夕食時には小説家などのゲストを招いて会食という、密度の濃いスケジュールが待っていました。日本語へ通訳してもらえるのですが、たとえば作家と出版社とをコーディネートする出版エージェントといった日本には類例のない業種については、話の理解が難しく、つねに気を張りつめ通しでした。

## 「聴く本」と朗読会

多数の場所を訪問するなかで、日本との違いを最も大きく感じたのは、「本を声に出して読んで聴く」文化が強くある、ということでした。

書店の棚に、本の内容を朗読してCDに収録した「聴く本」(Hörbuch)とよばれるオーディオブックが多数並んでおり、現在ではドイツ国内全刊行点数の5%に上るそうです。ラインナップは文芸物にかぎらず、ミステリーや、歴史・伝記、ドキュメンタリー、料理のレシピなどの実用書と、一般向けの分野はほとんどカバーしており、紙の本の新刊書が発売されると同時にオーディオブック版も発売になることも珍しくありません。日刊新聞社デー・ターゲスタイトウンクで話を聞いた折にも、文芸物の書評記事のうち三分の一はオーディオブック用に枠を確保しているということでした。訪問先のひとつであるオーディオブック専門出版社のアルゴンは、もともと紙の本も出す版元でしたが、五ユーロの廉価で出したシリーズがヒットしたため、二〇〇五年からオーディオブックのみを出版するようにになりました。ターゲットとして、文字を読むのが辛くなる五五歳以上のシニア層が有望な市場となるので、その年代に合わせた企画を今後増やしていくそうです。著名俳優を朗読者として起用したオーディオブックは、ファンに向けて街中にも大きな広告が出ているのをいくつも見

かけました。

この日本ではあまりなじみのない「本を声に出して読んで聴く」文化は、「朗読会」というイベントが頻繁に行われていることから伝わってきました。私たちが連れて行ってもらったのは、『朗読者』がベストセラーになった小説家ベルンハルト・シュリンクの自作朗読会でした。会場はルネサンス劇場というアールデコ様式の建築で、二〇〇人ほど収容の客席が満席。ステージ上でシュリンク本人が自作の一節を読み上げるのに耳を傾けつつ、合間に司会者とおしゃべりを挟むというスタイルで一時間半ほどでした。開演前や休憩時にはお酒や軽食をつまみ、音楽会と同じように、ドイツの人々のアフターファイブの楽しみの場であるようです(ただし、音楽会と違って朗読会は、ドイツ語を聞いて理解できない者にとっては多少辛い時間であったことを書き添えておきます)。

### ドイツの大学出版部を訪問

さて、文学の紹介を主目的とするこの研修旅行の主旨から外れるとはいえ、やはり私が入るには学術書、そして大学出版部の状況です。しかし、ドイツの大学出版部については聞いたことがありません。問い合わせたところ、ベルリン自由大学、フンボルト大学と並ぶベルリン三大学の一つであるベルリン工科大学の出版部への訪問を特別にアレンジしていただきました。

【ベルリン工科大学出版部】一九六〇年、大学図書館内の部局として発足。二〇〇二年出版部として独立（とはいえ人件費・家賃は大学負担）。担当者のリュドガー・シュネーマン氏（大学図書館・大学ウェブサイト担当との兼任職員）のほか、スタッフはフルタイム一名、パートタイム一名という規模。当面は、製作原価を回収できればよしとしている。製作原価は、出版会と著者の所属学科が等分で資金負担。製作原価以上に売れた分については七五%が著者に支払われる。著者が全額負担して出版する場合もある。著者は、版下まで作成の義務を負う。内容については大学教員による査読を経る。年間刊行点数は三〇点程度。初版五〇〜一〇〇部程度、最大で四〇〇〜五〇〇部。ほとんどが学位論文。刊行点数のうち九割がドイツ語書目。今後は、紙版とオンライン版を同時刊行して、まずは多くの人の目に触れる方向へシフトしていきたいとのこと。

【ドイツの大学出版部協会】現在、十数校が加盟しており、うち一校ボルツァーノ大学はドイツ語圏イタリアの大学。いずれもベルリン工科大学と同程度の小規模な出版部で、加盟校は、年一回定期的に会合をもっているが、協会としてのまとまった活動はこれからとのこと。

## ライプチヒ・ブックフェア

研修の後半、三月一三〜一五日は特急列車で移動し、ライプチヒ・ブックフェアを見学しました。オーブニングに

地元のゲヴァントハウス管弦楽団が演奏予定でしたが残念ながら中止。しかし、会場までの市電が満員になるほど多数の人が初日の朝から詰めかけていました。毎年秋のフランクフルト・ブックフェアが大規模ですが、春のライプチヒでは、よりビジネスライクなフランクフルトとの差別化戦略として、文芸書・児童書にジャンルを絞り、文学・出版文化の祭典として作家と読者が交流する楽しみの場となることを目的としています。会場以外にも市内各所で有料・無料の朗読会（ここでも！）が行われ、読者と作家がじかに交流できる場を提供する機会となりました。「世界でいちばん美しい本」コンクールもブックフェアの目玉として有名ですが、最終日には、アニメキャラのコスプレコンテストも行われて、優秀者（と保護者）は在ドイツ日本大使館に表彰され、記念のパーティには私たちも招待していただきました。

じつに密度の濃い研修旅行で、ここではそのごく一部しか記すことができませんでした。最後に、企画から旅行中の引率まで何から何までお世話になったゲーテ・インSTITUTE図書館長のクリステル・マーンケ先生、そしてドイツ滞在中にガイドと通訳をしてくださったウォルフガング・パウアー先生に、とくに感謝を申し上げます。

# 韓国・国立忠北大学出版部二十五周年記念大会に参加して

竹中英俊  
(東京大学出版会)

二〇〇八年十月二十一日、曇天のもと、韓国仁川国際空港に降り立った。韓国の中西部、忠清北道の清州市にある国立忠北大学で開かれるシンポジウムに参加するためである。高速バスを待つ間に空港駅の周辺を歩き、韓国の土を初めて踏みしめた。人工的な植相ではあるが、紅葉を始めた落葉樹は日本の関東地方で見るとそうは変わらない。私は異国の地に来たのだろうか。むしろ日本語と韓国語という言語距離の近系の地に立ったのだという意識が強い。

シンポジウムの正式タイトルは「国立忠北大学出版部創立二十五周年記念国際学術大会・アジアにおける疎通（コミュニケーション）と出版の共同構築」である。本シンポジウムに参加するきっかけは公共哲学共働研究所の金泰昌（キム・テチャン）所長からの要請であった。金先生は、一九八〇年代に同大学の行政学院の院長を勤めた経歴ももち、また東大出版会刊のシリーズ『公共哲学』全二十巻の

編者である。

関西国際空港から金先生の同道であった。仁川空港でバスに乗り中央高速道路を走る。漢江（ハンガン）を挟んでソウル中心部を東に見て一路三時間。色づいたプラタナスの並木が六キロも続く道を経て清州高速バスターミナルに着く。タクシーで忠北大学へ。九階建ての本部棟前で降りる。忠北大学出版部の部長であるキム・ヨンファン教授に迎えられる、七階にある大学出版部の事務所に案内される。広めの研究室二部屋分が充てられている。

挨拶もそこそこに渡されたのは、シンポジウムのペーパーをまとめた書籍である。菊判並製二百二十八頁、本文二色刷り、表紙には韓国語のタイトルと著者名があり、本文の衛星写真がカラーで印刷されて、その背景に漢字で「疎通」と「出版」の文字が薄く印刷され、その定価は一万二千ウォン（約千円）。キム教授は「十五分前に届いたばかり



写真1 シンポジウム会場前、左：筆者、右：金泰昌

りです。」と満面の笑み。

感激する。私が日本語のペーパーをファクスで送ったのが十月十二日曜日。金泰昌先生が主宰した三日間の公共哲学京都フォーラムの最中に新宿南口のホテルで仕上げたものである。それが、まさか、書籍となっているとは思わなかった。それも、日本語と韓国語とのふたつの言語で：。国際会議を開くときのゲストを迎える作法を教えられた。

十月二十二日、小雨のなか、学内の会議場でシンポジウムが開かれた(写真1)。リム・ドン Chol 総長の挨拶に始まり、韓国・日本・中国・フィリピンの四カ国十二人の

発表がなされた。その

詳細は前記の書籍『疎通と出版』にゆだねる。ここでは、

国立忠北大学出版部について紹介しておきたい。同出版部の部長であるキム・ヨンファン教授には、シンポジウムの前日に大学から車で十五分ほどの龍潭洞にあるお住まいのマンションに招かれて交歓

した。教授は倫理学とくに仏教倫理を専攻している。教授はシンポジウムの全体をコーディネートするとともに、ご自身「Public Communication of Han and Publication」という題で発表された。

《国立忠北大学出版部は一九八三年に設立された。学内向けの教科書の出版を中心として活動をしてきたが、二〇〇〇年その発行元の名称を「図書出版開新」に改めた。組織活動名としては国立忠北大学出版部を維持しつつ発行元としての名を変えたのは、二十一世紀における大学の公共的な出版物の価値を位置付け直すという意図による。大学の公共的出版物の新しい価値は公共哲学によって打ち立てられるのが望ましいと考える。》

キム教授の説明を踏まえて『疎通と出版』を改めてみるとハングルで「開新名品叢書」とシリーズ名がある。発行元の名称「開新」にはどのような意味が込められているのか。「開新」は、同大学の所在地の名称(開新洞)である。と同時に、その言葉には日本では「創発」と訳されることもある。‘emergence’の意味も込めている。そしてまた、同大学の総長ほか関係者からいただいた名刺の校章には‘novaperio’ (ノヴァー新+アペリオ=開く)とある。忠北大学と忠北大学出版部=図書出版開新との並々ならぬ意欲を感じた。

私自身も「出版と公共性」という題で発表した。大学が university から transversity へと不可逆的な転換が進んで

いる中で、大学出版部もまた“press”（「出版」）から“publishing”（「開版」）への転換を果敢に進めていかなければならないという趣旨で、『新しい出版の概念と構造』の創出を訴えた。この「転換」と「創出」はまさに「開新」を意味するものであり、忠北大学出版部Ⅱ図書出版開新の心意気と試みに対して、同志的連帯感を抱いた。

忠北大学がある清州市は、シンポジウムがある三日前、ペ・ヨンジュンの韓国文化勲章の授章式があつて、日本からチャーター便で四百五十人が来たと報道された地である。授賞式会場の近くには、世界最初の金属活字本『直指



写真2 清州古印刷博物館

心體要節』が高麗時代末期の一三七七年に印刷された興徳寺がある。グーテンベルグ以前である。シンポジウムでも西原大学のチェ・モンキ博士が『直指心體要節』を取り上げて東アジア世界のコミュニケーションの広がりについて発表した。この興徳寺跡に「清州古印刷博物館」

がある。前年二〇〇七年十月にマインツのグーテンベルグ印刷博物館を訪れた私としては無理をしても訪れたい場所である。

シンポジウムの翌日二十三日、帰国を控えて午前八時半には清州高速バスターミナルから出発しなければならぬ。早朝、私のペーパーを翻訳し通訳を務めていただいた作家のチャン・パルヒョン博士（古代日韓関係史に関する研究論文以外に大作『小説武寧王』がある）にお願ひして、清州古印刷博物館に行ってもらった。開館前であり館内には入れず、受付でパンフレットをいただいたのみ。正面には「直指」を花で飾っている（写真2）。背景には小高い裏山。館の入り口の右壁には、『直指心體要節』の逆字を、そして壁側には印字を配している。東アジアにおける印刷文化の光世を天籟のように感じた。

忠北大学出版部Ⅱ図書出版開新と東京大学出版会との関係で言えば、古田元夫著『ベトナムの世界史』（一九九二年）の韓国語訳が九月に刊行され、その直後の訪問となった。シンポジウムの会場で古田先生の教え子に当たり同書を訳された朴洪英（パク・ホンヨン）准教授から挨拶され、予期していなかっただけに、一冊の本が結ぶ人と人とのつながりに思いをいたし大変嬉しく思った。

このように忠北大学出版部二十五周年記念大会は、伝統を踏まえた「開新」の息吹あふれる地での「アジアにおける疎通と出版の共同構築」の饗宴となった。

# ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編 A5判/160頁/定価1680円

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ

## I. Prologue of Natural History

- 第1話 自然を記録すること……斎藤靖二  
第2話 自然史と本……青木淳一  
第3話 日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男  
コラム① 動物写真の世界

## II. History of Nature

- 第4話 ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司  
第5話 マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子  
第6話 京都の語り部：深泥池……竹門康弘  
第7話 遺跡の土に秘められた情報……松井 章  
コラム② ききみみずきん

- 第8話 遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀  
第9話 ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人  
第10話 日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

## III. Diversity of Nature

- 第11話 サクラソウとマルハナバチ……鷺谷いづみ  
第12話 日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和  
第13話 琉球列島の自然史……太田英利  
第14話 マンボウと標本……松浦啓一  
第15話 分類学事始め：タクソン、タイプ、名前……馬渡駿輔  
コラム③ サルにノミはいない？ 幻の定説

## IV. Story of Nature

- 第16話 クマ大量出没の謎……大井 徹  
第17話 ふしぎの国のアリ巢……丸山宗利  
第18話 現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫  
第19話 子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲  
第20話 熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗  
第21話 殿様の自然史……松岡明子  
第22話 幻の口バと男たち……木村李花子  
第23話 食の博物誌：多民族国家のハイ・テイー……周 達生  
コラム④ アリジゴク of 自然史

## V. Epilogue of Natural History

- 第24話 遺伝子を通じた動物との対話……村山美穂  
第25話 ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田 睦  
コラム⑤ 小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一  
自然史文献リスト



# 大学出版部ニユース

## 創立四五周年記念事業

協会の創立四五周年については、既に本誌でも紹介されたが、主な記念事業について触れておきたいと思う。まずブックフェアは大学出版部新刊コーナーの常設店・紀伊國屋書店札幌本店を皮切りに、主に全国の大学生協を中心に「ご協力をお願いし開催した。一二月には、関係各位にご参集いただき「感謝の会」を開催した。これらの周年事業は読者、お取引関係者、業界関係者等、日頃より支えられ、ご協力をいただいている各位に感謝を顯す特別な催事であり、その気持が広く、深く伝わることを願うものである。協会では催事のほかに、五周年毎に編纂・製作する年史「四五周年の歩み」を発行、創立趣旨、会員各社の沿革、年表、部会・人事紹介等を創立から現在まで網羅し、その内容は比類のない貴重な出版史料といえよう。立脚基盤である大学、出版が激しい変化に直面している現在、是非活かしたい貴重な記録でもある。最後に進行中の記念事業があることも付け加えておきたい。

## 追悼・市川昭夫事務局長

あまりにも唐突で言葉も無く、哀しさと口惜しさが混在する二〇〇八年の大晦日。多くの人の野辺送りを受けて、市川昭夫氏は天国へ旅立った（一二・二八心筋梗塞で急逝）。いつも白いシャツに濃紺の背広をお洒落に着こなし、少し斜に構えた姿が眼裏に焼きついて消えない。

胃癌摘出手術の無事終了と退院を報告したのは一二月五日の理事会。協会復帰は一月三〇日の常任理事会・出版五団体合同新年会のはずであった。にも拘らず「オレ、暇なんだよ」と何度連絡を入れてきたことか。最後の電話は二六日「大人しく静養に努めなきゃ！」と言うと、市川さんは電話の向こうでいつものように笑っていた。

この一年、市川さんとは協会事務局業務で多くの時間を共有した。仕事を人に押し付けず、率先垂範する潔さは見事なものであったが、反面垣間見せる頑固でセツカチな性格は、市川さんの人間味を際立たせるものであった。まだまだ生きがいて欲しかった。協会としてもかけがえない人材を失った。合掌。（三浦義博）

## 北海道大学出版会

▼常磐野和男・大友詔雄・田中幸雄「最大エントロピー法による時系列解析—M e m C a i c の理論と実際」第2版（A 5判・二九四〇円）自己相関に関する最大エントロピー法を用いてクロススペクトルを計算する新しい方法を提案。

▼足達富士夫「私のすまい史—関西・北海道・パリ」（四六判・一八九〇円）庶民生活者の暮しのすまいとは何かを考へ続けた、人間主義の建築思想。

▼深瀬忠一・上田勝美・稲正樹・水島朝徳編著「平和憲法の確保と新生」（A 5判・三七八〇円）人権の尊重なくして平和はなく、平和に生きることなくして人権の尊重もありえない。平和的生存権を擁する憲法の確保と新生を願う憲法・国際法研究者の論文を集成。

▼左近幸村編著「近代東北アジアの誕生—跨境史への試み」（A 5判・三三六〇円）ロシアの進出と東アジアの在来秩序の変化がもたらす一九世紀東北アジアへの影響を、執筆者間で各章を相互参照し議論する「跨境史」的手法によりさまざまな角度から検証。北海道大学スラブ研究センター「スラブ・ユーラシア叢書4」



## 弘前大学出版会

▼『未利用バイオマスとしてのりんご剪定枝の活用戦略』弘前大学農学生命科学部附属未利用バイオマス研究センター編（A5判・五五頁・定価五八八円）木質系バイオマスとしてのりんご剪定枝の有効利用は、資源の循環利用という観点からばかりでなく、大気中の二酸化炭素の削減という点からも積極的に取り組む課題である。本書では、剪定枝の堆肥化からリンゴ園に帰すという循環型農業の取り組み等、剪定枝の有効利用の可能性をさまざまな角度から模索する。

▼『白神山地の魅力』弘前大学農学生命科学部附属白神山地有用資源研究センター編（A4判・七二頁・定価一〇五〇円）本書は、世界自然遺産白神山地が持つ魅力的な資源について多岐にわたり紹介する、小中学校向けの副読本である。白神山地の猿や小動物、ホタル、シラネアオイなどの昆虫や植物、微生物、遺伝子、土壌などの総合的な内容となっている。また、環境教育に関わりを持つ施設や環境教育に実際に取り組んでいる方々の事例も紹介し、教育現場で指導される先生方の利便性にも配慮した。

## 東北大学出版会

▼中田英幸著『ドイツ信託法理—日本信託法との比較—』（A5判、二〇四頁、三一五〇円）

平成十八年の全面改正以降、学会および実務現場で大きな注目を集めている信託法。他の私法制度とは異質の理念を持ち、その運用は、時に他制度との軋轢を生むこともある。本書は、理念・運用両面で類似性の高いドイツの信託法を取り上げ、その生成と発展過程を鋭く考察し、日本の信託法に対してどんな示唆が得られるかを検討したものである。我が国の信託制度の将来像が見える。

▼井本佳宏著『日本における単線型学校体系の形成過程—ルーマン社会システム理論による分析—』（A5判、一八二頁、三一五〇円）

巷間で言われる「教育の自主性・自律性」とは、人間の思惑を超えた、文字どおり「教育そのものの自主性・自律性」なのかもしれない。この命題に対してルーマン社会システム理論からの分析を試みた本書は、我が国の教育システムの展開過程を丁寧追い、いま求められている学校体系の再構築に一石を投じている。

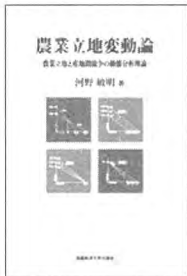
## 流通経済大学出版会

▼『農業立地変動論—農業立地と産地間競争の動態分析理論—』河野敏明著（A5判・六一〇頁・定価六三〇〇円）

日本経済の高度成長に伴い、農業経済も大きく変貌する。その激動する動態過程を立地論的に分析し、産地形成・産地間競争などの実践課題に対応するために「現状分析立地論」を、ダン地代関数の比較静的効果と「孤立化法」の応用により展開する。また、農業基本法以降の我が国農業の動態変動過程を、都市化、交通輸送の技術革新、例えば高速道路の整備とトラック輸送への推移、海上フェリーの普及、生産・流通技術革新、基盤整備、施設園芸の発達などの関連変動要因ごとに実証的に分析した意欲的労作。

農業経済研究者はもとより、国・地方自治体の農政担当者、農協などの農業団体・出荷組織、生産者にも参考となる事例が分析されている。

農業・物流関係者の一読をお奨めしたい。



## 聖学院大学出版会

▼標 宮子「とはずがたりの表現と心―  
「問ふにつらさ」から「問はず語り」へ」  
(A5判上製、五六〇頁、九四五〇円)

「とはずがたり」は一九三八年に宮内  
庁図書寮で発見され、埋もれた古典とし  
て話題になった文献であるが、それ以降、  
多くの研究者によって執筆年代の確定な  
ど地道な注釈研究がなされてきた。

本書は、それらの成果を踏まえながら、  
これまでの研究の問題点を明らかにする。  
そして作品の背景である宮廷貴族の生活  
を解明し、主題となつているさまざま  
宮廷の人間関係の中で苦悩する著者の生  
き方を現代に生き生きと甦らせている。

著者は「とはずがたり」は「虚構性が  
つよく物語文学のジャンルに位置づけら  
れるべきである」というこれまでの説に  
対しては「とはずがたり」の著者自身の  
固有性へのこだわり、自己をみつめ、真  
実を追求するその表現から「日記文学に  
位置づけるべきである」と主張している。

本書は、学位請求論文として提出され  
た研究に詳細な文献と索引を付したも  
の、聖学院大学学術研究叢書の第五巻と  
して刊行された。

## 聖徳大学出版会

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医  
学から見た音楽と心の関係―』(四六判・  
二八〇頁・二一〇〇円) 音楽療法の第一  
人者である著者の、長年にわたる研究を  
ベースにし、専門的でありながら一般の  
読者にもわかりやすい内容となつてい  
る。音楽療法は心身の病理に対してどの  
ような効果をもたらすのか、音楽はなぜ  
心を癒すのか、心と音楽との関係を解き  
明かす。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の  
形成のなから―』(四六判・二八〇頁・  
二一〇〇円) 本書では小児科医の医療現  
場での経験をもとに、病氣と闘つた人た  
ちの実例が紹介され、著者との交流が描  
かれていく。純粹な医学書ではなく、高  
度に発達した現代医学において人間的交  
流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱「親  
子で楽しむ唱歌集」(音楽CD・三四〇  
〇円) 文部唱歌をはじめ、「春が来た」、  
「小さい秋みつけた」など文化庁「親子  
で歌いつこう日本の歌百選」にも選定さ  
れた二三曲を含む全四二曲が収録されて  
いる。

## 麗澤大学出版会

▼伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集第七  
巻 比較文明論I』(七一四〇円) わが  
国における科学史および比較文明研究の  
第一人者伊東俊太郎の業績を集大成した  
『著作集』(全十二巻)の第一回配本。著  
者の比較文明論の基礎概念や基本的枠組  
を知るには最適の書。偶数月刊行。

▼釋宗演講話／篠田英雄編『一日一話  
菜根譚講話』(二二九四〇円) 中国明代の  
古典、程自誠の『菜根譚』を、日本近代  
稀有の禅僧(夏目漱石が参じ、「門」に  
記述がある)の風雅にして滋味豊かな評  
釈とともに、一日一話形式で編纂。

▼二宮康裕著『日記・書簡・仕法書・著  
作から見た二宮金次郎の人生と思想』(五  
四六〇円) 旧来の「金次郎物語」、伝説  
の「金次郎」像から脱却し、金次郎自身  
の文献のみに依拠した「等身大の金次郎」  
を提示した、画期的「金次郎」伝。



## 慶應義塾大学出版会

▼アジア政経学会監修「現代アジア研究」全3巻（各四二〇〇円）日本におけるアジア研究の到達点と可能性を示すシリーズ。設立五〇周年を超えた伝統あるアジア政経学会の会員を中心とした気鋭の研究者五〇名による総合的実証分析。1『越境』（高原明生・田村慶子・佐藤幸人編著）多様な越境現象が、物理的抽象的コミュニケーション形成につながる可能性を検証する。2『市民社会』（竹中千春・高橋伸夫・山本信人編著）西欧のものであった市民社会概念のアジア的展開に注目し、その意義を問い直す。3『政策』（武田康裕・丸川知雄・巖善平編著）各国の政策分析を通じ、グローバル化した世界で国家が果たすべき適切な役割を明らかにする。▼細田衛士編著『資源循環型社会のリスクとプレミアム』（三一五〇円）慶應グローバルセキユリテイ研究所の公開講座を書籍化。企業、政府、国際機関、大学、NPOから第一線の実務家・研究者が結集、最新の取組みを語る。環境リスクに晒されるのか？環境プレミアムを獲得するのか？未来を見据えた資源戦略こそが、二一世紀の国際競争力を決定する！

## ケンブリッジ大学出版局

▼Cambridge Archive Editions  
イギリスで二十年前に創設されたArchive Editionsは、政府記録をはじめとする歴史資料の刊行の分野で学術研究に貴重な貢献をしてきました。この度、そのArchive Editionsをケンブリッジ大学出版局が新しいインプリントとして迎え、Cambridge Archive Editionsとして扱うことになりました。今日までに、東・東南アジアコレクション（九タイトル）、中近東コレクション（百七タイトル）、ヨーロッパ・スラブ・カフカスコレクション（十タイトル）が出版されており、多くの国の国家遺産、政治的發展に関するファクシミリ版のオリジナル文書や地図を数十万ページに渡り収録しています。刊行タイトルは主に主要書類のコレクションと政治報告のシリーズを柱とし、今後も、これまで知られていない資料、入手困難な資料などの刊行を予定しています。



## 産業能率大学出版部

▼坂本裕司著『戦略的営業利益マネジメント・コストをかせずにホワイトカラーの生産性を向上させる』（二五二〇円）本書は、機会利益が科学的に測定できるホワイトカラーをターゲットにして、機会利益を実益に変え、生産性向上と企業への更なる財務的競争優位性をどう創り出していくかを解説。  
▼日沖健著『実践ロジカルシンキング―ビジネスで成果を上げる本当に使える思考法』（二一〇〇円）近年、ビジネスパーソンの基本スキルとして、ロジカルシンキングが注目を集めています。本書は、ビジネスで起こる状況を題材にロジカルシンキングを学び、実際のビジネスでどのように戦果を上げることができるかというところでわかりやすく解説。  
▼（学）産業能率大学総合研究所編著『MOTの新展開―技術革新からビジネスモデル革新へ』（二六八二五円）本書は、価値創造活動の主軸をアーキテクチャ戦略を中核とするビジネスモデルに移し、顧客価値と企業の事業価値（利益、付加価値）を創造するための考え方や手法を解説。

## 専修大学出版局

▼施錦芳著『開発援助の貧困削減インパクト』（A5判・二二二頁・三九九〇円）日本の対中ODA案件を素材としたフィールド調査に基づき、こういった開発援助プロジェクトが当初意図しなかった貧困削減へのインパクトを探る。南昆鉄道整備事業、昆明市上水道整備事業などのフィールド調査による事例研究において、円借款協力を概観し、開発援助のインプリケーションに言及する。また中国の指導者やメディアや研究者たちが対中ODAをどう評価しているかについて分析を試みる。

▼上原聡著『感情マーケティングの理論と戦略』（A5判・一九六頁・二七三〇円）商品やサービスを差別化することが難しい市場下においては、顧客の気分や感情に、マーケティングの視点を求めることが有効になる。本書は、消費社会論や心理学領域の理論分析をへたうえて、感情を考慮した実務的マーケティング戦略の提示を図る。

## 大正大学出版会

近刊

▼小嶋知善編『久保田正文著作選』（A5判 六〇〇頁）。久保田正文は、戦後、短歌雑誌「八雲」の編集者として短歌の世界に登場し、その後、文藝評論家として世に知られるようになった。文藝誌「文學界」（文藝春秋刊）掲載「同人雑誌評」の仕事を顕彰され、菊池寛賞を受賞している。本書には、小説・批評・随筆など、独自の視点に立った評論を中心に掲載する。これらは、戦後の文学会の動向をみるうえで、貴重な資料になると思われる。

新刊

▼世界の宗教教科書プロジェクト編『世界の宗教教科書』（DVD版 定価八四〇〇円）。本学創立八〇周年記念の出版。英国・米国・フランス・韓国など九カ国の宗教教科書の翻訳と解説を収録する。

▼倉島節尚著『日本語辞書学への序章』（A5判 四一〇頁 四九三五円）日本語辞書学への考究及び実践について論述。

▼藤原聖子著『三大宗教 天国と地獄 Q UESTION 伝統的他界観から現代のスピリチュアルまで』（四六判 二四〇頁 一四七〇円）

## 玉川大学出版部

▼有本章編著『変貌する日本の大学教授職』（一六三〇〇円）知の再構築と呼び立て大学改革が行われた激動の十五年間に、専門職としての大学教授職はどう変貌を遂げたのか。学問の府から知の企業体へと大学が舵を切るなかでの新しい教授職像を分析。

▼汐見稔幸・和久洋三著『トークトゥー ク 育つ喜び 育てる楽しさ』（一六八〇円）子供をとりまく環境は変わっているが、子供自身は昔と変わったのか？不安な時代にどう子育てをすればよいのか、新しい創造共育を提唱する童具デザイナー・和久洋三さんと、幼児教育の水先案内人・汐見稔幸さんが語り合う。

▼水間千恵著『女になった海賊と大人にならない子どもたちーロビンソン変形譚のゆくえー』（六〇九〇円）十九世紀後半以降のイギリスでは、『ロビンソン・クルソー』と同じプロット、テーマ、状況設定の小説群が数多く生み出された。「国民国家」「性」といった観点から、児童文学史上「黄金時代」の文学と社会を考察する。

## 中央大学出版部

▼岡本義朗著『独立行政法人の制度設計と理論』（八〇八五円）独立行政法人の経営・会計に関する理論体系とそのロジックを企業経営ないし企業会計における理論をベースに構築する。

▼武智秀之著『政府の理性、自治の精神』（二五二〇円）日本の自治とガバナンスの構造を分析し、統治構造、政府間関係、自治体間競争、地域ガバナンス、共生、参加、公共空間の実態を明らかにする。

▼檜崎みどり・山内惟介編『シユトウンブ教授講演集／変革期ドイツ私法の基礎的枠組み』（三三六〇円）私法の現代的評価をめぐる基礎的研究からEU統一相統法作成まで広範な素材を扱う。

▼藤本哲也著『性犯罪研究』（三六七五円）わが国のみならず海外の性犯罪処遇プログラムと性犯罪者対策について紹介した本格的な性犯罪研究書。

▼斉藤孝編『社会科学情報のオントロジ―社会科学の知識構造を探る』（五〇四〇円）オントロジは知識の知識を研究するものであることから「メタ知識論」といえる。本書はそのオントロジを社会科学の情報化に活用した。

## 東京大学出版会

▼高橋進／大串和雄／城山英明編『政治空間の変容と政策革新』全6巻完結

20世紀後半以降、グローバル化の進展、科学技術の発展、新メディアの登場など、先進諸国の社会は大規模な変化に見舞われている。さまざまな領域において新たな政策課題が生まれているなか、この課題への応答として、現在の政治変容を的確に捉えるシリーズが完結した。「政策システム」というキーワードを軸に、先進国における政策の実験と革新のメカニズムを浮き彫りにし、新しい政治の見方を提示する（定価各巻四七二五円）。

1 『政策革新の理論』（城山英明／大串和雄編）

2 『国境を越える政策実験・EU』（平高健司編）

3 『分権改革の動態』（森田朗／田口一博／金井利之編）

4 『政権交代と民主主義』（高橋進／安井宏樹編）

5 『メディアが変える政治』（S・ポプキン／蒲島郁夫／谷口将紀編）

6 『科学技術のポリテイクス』（城山英明編）

## 東京電機大学出版局

▼長山勲『初めて学ぶ基礎エンジン工学』（A5判／三二五五円）近年、自動車的心臓部であるエンジンに、公害対策・省資源の観点からガソリンやディーゼルエンジンの特異化、燃料電池、ハイブリッドエンジン等のエポックが訪れつつあり、今後エンジンに関する大きな技術の変革が予想される。本書は、自動車エンジンの設計・実験・製造・整備に関わる技術者や学生がエンジンについてより良く理解することを目的とし、良質のエンジンが製造されることを願うものである。

▼日本画像学会編『デジタルプリンタ技術 ケミカルトナー』（A5判／三〇四五円）ケミカルトナーは重合法を中心とする化学的手法を用いて製造された、電子写真に用いられるトナーである。本書ではトナーの化学的製造方法に加えてトナー全般にかかわる事項もカバーするようにした結果、解説すべき項目が多岐にわたったので、複数の執筆者が専門分野ごとに分担し、全体として体系的に理解できるように構成とした。電子写真技術のブラッシュアップを志す読者の方々には有益な知見をもたらす一冊である。

## 東京農業大学出版会

ハカラー写真集100シリーズ▼

▼沖永良部島100の素顔—もうひとつのガイドブック—沖永良部島100の素顔編集委員会編

南西諸島は、長寿の島々として全国の多くの人々に知られている。その理由を解明していく中で、島々に昔から利用されている固有植物資源の存在を知ることができた。しかし、現在では食生活の多様化、固有植物資源の生産性や栽培化が困難なことから、機能性を持った多くの固有生物資源が消滅していることに気が付かされた。そこで、我々は固有植物資源の保全や栽培の安定化を図り、有用性や南西諸島独自の食料資源の確保を目指し、地域興しに貢献できるような研究を継続しようとした。本書はそういった中で、沖永良部の自然・農業・起業・歴史・民俗・文化・食文化・施設・教育福祉などについて、それぞれの専門の目で写真とエッセイで紹介したもの。観光ガイドとはひと味違ったガイドブックとして利用いただきたい。

平成二十年十一月／四六判

二二〇頁／税込価格二一〇〇円

## 東京農工大学出版会

▼「蝶の道—Butterflies—」(A4変形版・一三六頁・三六〇〇円)

昆虫写真家・海野和男による蝶の写真集。本書は、世界と日本各地で、風景とともに撮影した蝶の生態写真約二二〇点をまとめたものである。

海野和男には、十才の頃に長野県で水を飲み路上においていた蝶たちが一斉に飛び上がる光景を見た体験がある。その写真家は、二〇〇六年にペルーのアマゾンで、無数の蝶が飛び交う路上を歩いていた。この時、少年時代の蝶との出会いが、鮮明によみがえり、そこから本書は生まれた。写真解説は、一六頁をさいて掲載。「蝶を撮り続ける」という章には、三〇年ほど前から同じコンセプトで撮影してきた写真を十二点ほど解説とともに掲載している。蝶の本格的な写真集としては、十五年ぶりとなる渾身の書である。



## 法政大学出版局

二〇〇八年一月より、主に社会科学系の書き下ろしと翻訳を含めた新しい叢書『サピエンティア』の刊行を開始した。

これまでに、▼近代以降のアメリカの戦争と内外関係を扱った菅英輝編著『アメリカの戦争と世界秩序』(三九九〇円)、▼社会主義の追求から欧州統合の促進へ路線を変えたフランスの政策を一次資料をもとに論じた吉田徹『ミツテラン社会党の転換』(四二〇〇円)、▼ドイツの福祉国家体制を通時的に検討した川越修・辻英史編著『社会国家を生きたる』(三七八〇円)、▼旅券を通して個人のアイデンティティと国際システムの形成を解き明かすJ・トーピー／藤川隆男監訳『パスポートの発明』(三三六〇円)、▼共生と連帯をめざす人々による小さなプロジェクトを生き生きと描きだしたA・O・ハーシユマン／矢野修一他訳『連帯経済の可能性』(三三二〇円)、▼今日もなお多くの分野に影響を及ぼし続けるトクヴィル・ウエーバー・アドルノのアメリカ体験からヨーロッパを再照射するC・オツフェ／野口雅弘訳『アメリカの省察』(二二〇〇円)などを刊行した。

## 武蔵野大学出版会

▼田中教照編著『仏教最前線の課題』（A5判・定価二六二五円）現代に開かれた仏教学構築を目指して武蔵野大学仏教学化研究所に参集した9人の研究者の共著。近代日本の仏教学は、欧米の文献学的研究の方法論の輸入により発展したが、その研究成果が文献研究の範囲にとどまらず、社会に還元され、今を生きる人間の苦悩の解放に役立ち、人々の生の実現のために力となっているかを問いただしたのが本書の出発点である。仏教は現代の諸問題を解決する力となり得るのか？「仏教・人間・科学の総合的研究」の第一段階の成果を武蔵野大学シリーズ6として二〇〇九年一月刊行予定。

▼永田尚三著『消防の広域再編の研究』（A5判・定価二六二五円―予）「平成の大合併」による全国の市町村の再編は一段落の観があるが、消防行政はこれから本格的な広域再編に突入する。大規模災害への対応、有事関連法案整備により浮上した武力攻撃災害への対応など、広域再編が急務となった消防行政の研究書。武蔵野大学シリーズ7として二〇〇九年一月刊行予定。

## 武蔵野美術大学出版局

▼『美術教育の動向』大坪圭輔・三澤一実編（A5判、二八八頁、予価二一〇〇円、三月刊行）

教員免許更新講習のテキストとして編まれた本書は、美術教育のエキスパート二名による実践研究集成である。

第一章〈教育方法開発〉では、学習指導計画、評価、鑑賞教育方法と、ワークシート活用の実例をひきながら授業資料について論じる。第二章〈題材開発〉では幼稚園から小・中・高校まで一七の実践事例を多数の図版とともに紹介。園児から高校生まで、美術教育の連続性を考慮した豊富な事例は他に例をみない。

第三章は〈教材開発〉として、画材の基礎、安全性、歴史を言及。第四章〈連携開発〉は、学校間、美術館、地域との連携について論じつつ四つの事例を、さらにアートプロジェクトでは国際交流をふくむ実践例二つを掲載。

授業時間が減少傾向にある美術教育の現状にたいして、教師のみならず、保護者や地域住民、美術館学芸員をくわえた現場での工夫を盛り込み、美術教育の未来と可能性をひらく一冊となっている。

## 明星大学出版部

▼みるみるわかる心理アセスメント  
く学ぶ・使う・活かす  
黒岩誠・野口和也編著

「第1部」で、現代的なトピックをもとに、心理アセスメントの考え方やそれに必要な知識と、心理検査の作成方法や施行法を「学び」、「第2部」で心理アセスメントや心理検査を「使う」ことによって心理臨床サービスを受ける人々の支援に「活かす」ために必要な知識を身に付けられるよう構成されている。

現在、心理学に寄せられる社会的ニーズを講義ノートの形式に叙述したテキスト。

A4判・三二六頁 三〇〇〇円

▼経済指標解説法―経済を見る眼を養う  
吉川紀夫著  
新書判・二三〇頁 九四五円

平成一八年一二月の教育基本法の改正に始まる教育法規の改定、それに伴う新学習指導要領の発表など、教育をめぐる状況は大きく変化している。教員養成課程のテキストを主とする本出版部では、新学年度に対応すべく改訂・新版作成の作業を続けている。

## 東海大学出版会

▼吉田欣吾著『言の葉』のフィンランドー言語地域研究序論』（A5判上製、六三〇〇円）

OECDによる「生徒の学習到達度調査」において高い学力を示したフィンランドの教育が日本でも注目を集め、幾つかの書籍が出版されているが、フィンランドが示す高い指数はこれだけではない。「環境持続可能性指数」「世界の腐敗認識指数」「報道の自由度」「世界男女格差報告」の何れにおいても世界最高水準を示している。さて、この人口僅か五〇〇万人のフィンランドを「言語」という視点から見ると、社会を支えている全く別の仕組みが見えてくる。フィンランド語、スウェーデン語、サミー語話者などで形成される複数言語社会フィンランドには、それぞれの「言語権」が確立し、「言語多様性」による「共生社会」が形成されているのである。著者の専門は「言語少数権」。多言語社会フィンランドの言語政策に着目し、「言語」をキーワードにフィンランド社会の特徴を描き出した渾身の一書。二〇〇二年には小会から『サミー人の話』を刊行している。

## 名古屋大学出版会

▼佐竹謙一訳『カルデロン演劇集』（六九三〇円）スペイン黄金世紀を代表する劇作家カルデロン。哲学劇から悲劇まで色彩渦巻く世界を凝縮した本格的選集。

▼伊勢田哲治著『動物からの倫理学入門』（二九四〇円）動物倫理という「応用問題」から倫理学全体へフィードバック。動物実験、肉食から人間の道徳を考える。

▼小川浩之著『イギリス帝国からヨーロッパ統合へー戦後イギリス対外政策の転換とEEC加盟申請』（六五一〇円）戦後イギリス最大の外交転換を描き出す。

▼小林寧子著『インドネシア 展開するイスラーム』（六九三〇円）世界最大のムスリム人口を抱える国家の歴史と現在、グローバル性と地域性を見通す。

▼遠藤 乾編『原典 ヨーロッパ統合史ー史料と解説』（九九七五円）原典史料が語る統合のダイナミズム。待望の史料解説集。『ヨーロッパ統合史』の姉妹篇。▼塩見治人／橋川武郎編『日米企業のグローバル競争戦略ーニューエコノミーと「失われた十年」の再検証』（三七八〇円）日米の九〇年代を分けたものは何か。競争の真の焦点を浮き彫りにする。

## 三重大学出版会

▼松尾芭蕉作『野ざらし紀行』の成立ー芭蕉文字データベースによる用字解析ー濱森太郎著（A5判六二〇頁・定価三七八〇円）。芭蕉自筆面巻の絵を読み解き、処女作を一文字単位で解析する。はしがき／第一章『野ざらし紀行』表現論／第二章『野ざらし紀行』用字論／第三章『野ざらし紀行』系統論／第四章誤解された『野ざらし紀行』／第五章 結語 芭蕉自身が「一念一動をしるす」と書いた処女作の絵と文字とを正確に読むと見えてくる文章の凄みを紹介する。

▼『語彙 表現（上級レベル）☆エッセンスI、II』藤田昌志著（変型B5判各八九頁（I）・八四頁（II）・定価各一五五円）。日本語能力試験一級レベルの語彙、表現各一〇八〇（I）、一〇二〇（II）を扱う。各課三〇個の語彙、表現。全体各三六課（I）、三四課（II）。左頁で各課語彙、表現について既習語彙、表現で定義、説明、右頁でその語彙、表現を使用した読解文を提示して、学習効率を飛躍的に増大させた書。留学生対象、日本語学習書。自習も可。



## 京都大学学術出版会

▼学術選書『新編 素粒子の世界を拓く』  
湯川・朝永から南部・小林・益川へ』  
湯川・朝永生誕百年企画展委員会編集／  
佐藤文隆監修(四六判・一五七五円) 南  
部・小林・益川——ノーベル賞に輝いた  
その業績を、「湯川の間の子論から標準  
理論」へという素粒子論の歩みの中に位  
置づけ、それが我々に何を教えるのかを  
考える。日本の誇る科学史を、珠玉の評  
伝と科学解説で読む。

▼『チャリテイとイギリス近代』金澤周  
作者(A5判・五二五〇円)一八世紀半  
ば以来のイギリスにおける百年余に及ぶ  
チャリテイ実践の歴史をはじめて活写す  
る。救貧法史や福祉国家形成史、近代化  
論や帝国史が描かなかつた福祉社会のも  
う一つの源。

▼『21世紀の河川学』芦田和男・江頭進  
治・中川一著(菊判・三九九〇円)水質  
は改善しつつあるものの、四季に変動す  
ることで生き物を支えた本来の姿は失わ  
れ、今や河は単なる「水路」と化してい  
る。環境の世紀と言うのなら、防災と流  
砂環境の改善を両立させた、新しい治水  
学が必要なのだ。

## 大阪経済法科大学出版部

▼経済史へのアプローチ「増補改訂版」  
2月刊行予定 金哲雄著(二一〇〇円)  
経済史の基礎的理解に役立つ経済史学  
の理論や、経済史全体(西洋経済史にも  
アジア経済史にも)に通ずる比較史的論  
点を取り上げながら、著者の研究を支え  
ている視点(宗教と経済の関係や、移民  
の経済的役割など)から、近代資本主義  
を経済史の主要な対象にして、次のよう  
な構成で「経済史へのアプローチ」を試  
みている。

第1章「経済史学」では、マルクスの  
史的唯物論などの経済史学、ヴェーバー  
の宗教社会学、ゾンバルトの移住論。

第2章「西洋経済史における諸問題」  
では、イギリス、ドイツ、アメリカにお  
ける工業化の概観、フランス工業化の遅  
れ、近代西欧におけるユグノーの経済的  
役割。

第3章「アジア経済史の諸問題」では、  
東アジア経済発展の特質や中国人移民の  
経済的役割、韓国工業化の特質、アジア  
経済史における宗教(儒教とプロテスタ  
ンティズム)の役割について論述してい  
る。

## 大阪大学出版会

▼杉田米行編『日米の医療—制度と倫理』  
(A5判・二五二〇円)日米両国の医療  
分野における歴史的展開と現状の共通  
点、相違点を、制度と倫理という二つの  
切り口から分析する。遺伝子治療、臓器  
移植、HIV自宅検査などをめぐって医  
療現場では何が起きているのか。新進気  
鋭の研究者がメスを入れる。▼秋田茂・  
桃木至朗編『歴史学のプロンティア 地  
域から問い直す国民国家史観』(四六判・  
二一〇〇円)近年の国民国家論の見直し、  
グローバル化の進展にともなう一国的  
な歴史学研究の限界と問題点、世界各地  
における地域統合の模索を勘案し、「広  
域の地域」「ミクロな地域」、グローバル  
な文脈から、国民国家的な歴史像を相対  
化する新たな歴史研究の観点と方法論を  
考察する。▼ロシア語教育研究会編著『授  
業づくりハンドブック ロシア語』(A  
5判・二五二〇円)ロシア語教育活動を  
テーマとする、ロシア語を教える人のた  
めの日本初の手引書。「生きた言葉」に  
重点を置き、わかりやすい例と様々なア  
イディアを多数掲載して、元気のあるロ  
シア語授業の展開法を提供する。

## 関西大学出版部

▼園田香融編著『南紀寺社史料』（A5判・八四〇〇円）紀伊山地の高野・熊野の神聖空間に根を下ろした新仏教諸派の軌跡をたどる。本末帳や託宣記等、すべて新出の未公刊史料。

▼沈 国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成―創出と共有―』（A5判・四五―五五円）一六世紀以降の西洋文明の東漸と、それに伴う東西の文化接触・言語交流の諸問題を取り上げ、そこに焦点をあてる論考を収録。

▼井上泰山著『漢籍西遊記―イベリア半島漢籍調査報告―』（A5判・三四六五円）スペインとポルトガルに流出した中国の書物に関する調査研究報告書。イベリア半島各地に保管されている漢籍の実態を明らかにし、個別の書籍に対する詳細な論考を収録。

▼井上 宏編著『上方文化を探索する』（A5判・一四七〇円）上方を愛する一七人の執筆者が専門性を生かして、多様な視点から上方の過去・現在・未来について追及し、上方文化のクオリティを探索する。

## 関西学院大学出版会

近刊

▼山田 武雄著

増補改訂版『提喻詩人 ロバート・フロスト』（A5上製・四九四頁・定価四四一〇円）

アメリカの国民的詩人、ロバート・フロストの詩の世界を「提喻」の視点から詳しく考察し、その本質と変遷を辿る。二〇〇〇年の初版に最新の研究内容に基づき改訂を行い、補遺を加える。

▼関西学院大学大学院司法研究科教育推進プログラム編

『市民が参加する刑事シミュレーション教育』（A5並製・約二〇〇頁・予価二一〇〇円）

▼窪寺 俊之・谷山 洋三・伊藤 高章・義平 雅夫・赤羽 正清著

『続・スリリチュアルケアを語る』（A5並製・約一四〇頁・予価一四七〇円）

▼前原 澄子著

『Festive Romances in Early Modern Drama: Nostalgia for Ancient Hospitality and wish-fulfillment Fantasy in Mobile Society』（A5上製・一六〇頁・予価三九九〇円）

## 九州大学出版会

▼宮本一夫・白 雲翔編

『中国初期青銅器文化の研究』（B5判・六五一〇円）

日中共同研究によって、二里頭文化以前の銅器・青銅器の悉皆的な実測調査・写真撮影を行い、これまで不完全な資料公開状況にあった黄河中・下流域の初期青銅器に対して、画期的な資料集積を示した。調査過程で得られた知見から、中原における初期青銅器文化の成立とその特徴、ならびにその展開過程を明らかにする。

▼片野 博著

『法令と行政による建設業の取締と統制』（A5判・七三五〇円）

戦前において建設業は、行政からは占業と同様の一種の「雑業」扱ひされ、行政所管組織も一定していなかった。本書は、戦前から昭和二十四年の建設業法制定までの建設業界を対象に、業界を管理し取り締まった法的規制の実態および所管行政官庁の変遷さらには行政に対する業界内の自主対応の過程を解明するものである。

## 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2009年1月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
株式会社協栄アドインフォ	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-14 立花日英ビル2F
カクタス・ジャパン株式会社	〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
株式会社クイックス東京	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-4
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井字薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巢郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社	〒601-8305 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区大塚2-35-7
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-11
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介しますことができます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

# 有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

## 北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内  
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

## 東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

## 聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1  
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30  
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

## ケンブリッジ大学出版局

〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階  
TEL 03-3291-4068 FAX 03-3219-7182

## 産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー9階  
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

## 専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階  
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

## 大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1  
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

## 東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内  
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

## 法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## 武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## 明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10  
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

## 大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155  
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172